

基調講演「現代社会における『新聞』の役割とこれからの姿」の概要

井上直樹（NHK チーフディレクター）

1. 新聞の現状

『メディア定点調査』（メディア環境研究所）によると、2008年には319分だった新聞やテレビなどメディアへの総接触時間は増加し、2020年には411分になっています。ニュース記事を読む手段として紙の新聞が減りましたが、スマートフォンやパソコンでニュースを読む時間はむしろ増えていると思います。

デジタル化が進む現状の中でも、文字の上限が決まっている新聞紙をつくる経験は、社会に役立つ次のスキルを育成すると考えています。

- (1) 「大事なことは何かを選び出す」
- (2) 「要点をまとめる」
- (3) 「わかりやすく説明する」

私はこれまで、新聞社で記者として国内外の出来事取材してきました。その仕事の中で、統計や数字を駆使して、現代の事象を伝える「データジャーナリズム」にも取り組みました。報道業界では、ニュースに様々なテクノロジーを取り入れ、新しい取材や報道の手法が生まれています。

2. 新しい取材の形

2018年、カメルーンで起きた女性と子供4人の殺害事件の映像がアフリカで拡散しました。カメルーン政府は当初自国での事件であることを否定しました。これに対し、英国の放送機関BBCは映像に移っている山の稜線と、ウェブ上に公開されている衛星写真を比較して地域を絞り込み、事件が起きた村を特定しました。WEB上で利用できる情報を活用する新しい取材方法もできてきました。その一方で、画像を加工して誤情報をつくることも技術的には簡単になりました。誤ったコンテンツに騙されないために、どのような加工が技術的に可能なのかを知ることも大切です。

3. 新しい「新聞」の表現

ニュースを伝える表現の方法も多様化していています。

例えば、米国の調査報道団体のプロパブリカなどは、難民が米国へ移るまでの日々を追体験できるコンテンツをネットで公開しました。地球で消費されるペットボトルの数を表現するために、頭上から大量のペットボトルが落ちてくるアニメーションを使ったロイター通信の事例などもあります。

デジタル表現が多様化している中でも、新聞紙上でも新しい表現方法を考えることはできます。The New York Times は新型コロナウイルスで亡くなった方々について、「計り知れない喪失」として紙面を死者の氏名や人物紹介でうめつくして事態の重大さを伝えました。

「どうやって事実や物語を伝えるか」という工夫や努力を考え続けることは大切ですし、ニュースの変化の中にあっても、記者の取材力がこれまでと同様に大切であることに変わりはないと思っています。